

1. “まねて、慣れて”身に付く言葉

赤ちゃんの前だからこそ気を付けよう

“言葉を、数多く、正確に知っていることが、他のどんな特性よりも成

功の原因である”ことが、アメリカで実証されたことは、前に述べました。この言葉の教育は、家庭で、生れた時からすぐに始められます。

赤ちゃんは、生れると間もなく、人の声を耳にし、それを聞くことによって聴力を育てつつ、聞いた声を脳に一つ一つ録音していきます。それが、やがて赤ちゃんの発する言葉の基礎になるのです。

人間の頭脳は、テープレコーダーのように耳から入る声を録音し、その繰返しの多いものから、これを再生装置に移し、話す能力に換えていくもののように思われます。

バイオリンによる幼児教育で有名な鈴木鎮一先生は、「音感は生れつきのものでなくて育てるものだ。だから、赤ちゃんの時から、出来るだけ最高の音楽、最高の演奏を聞かせることが大切だ」とおっしゃっています。言葉の教育についても、全くこれと同じように考えなけれ

ばなりません。

私の知人に、三歳のお子さんのある方がいます。最近にわかにお話が活発になってきて、盛んに両親とお話をするようになったそうですが、その中に、ポツンポツンと田舎の言葉やアクセントが出てくるの

コラム

部首

兪

兪

△と と人の三つの部首から成り立っている部首。旧字体では「兪」だが、新旧とも構造的には違いはない。△は、「集」の意味の部首で、三方から一所に集まることを符号的に示した指事字。△が原形。「兪」は“人の を集める”つまり、“人々の意見を集める”ことだと推察できる。

【検】 記録(昔は紙がなかったため、木や竹のふだに字が書かれた)によって意見を集約する、“しらべる”という意味の字。

【験】 たくさんの馬の中から駿馬を選抜すること。毛並みや体格を見ただけではわからないので、駈けさせて“ためし”てみなければならない。だから“ためす”が本義。

だそうです。

現在、その知人の家には標準語以外の発音をする人はいないので不思議なようですが、実は、このお子さんは、生後二年ほど、お母さんの実家のおばあさんのそばで育ったのです。つまり、ものも言えないし、歩くことも出来ない頃に録音しておいた田舎訛りを、おしゃべりが出来るようになった今、再生しているわけです。そう考えるよりほかに、その理由が考えられないのです。

そうしてみると、赤ん坊だから何をしても、何を言ってもわからないだろう、という考え方は、極めて危険と言わなければなりません。父親と母親とのいさかきも、赤ちゃんは、ちゃんと録音してしまうからです。

つまり、“赤ちゃんの前だから安心だ”ではなくて、“赤ちゃんの前だから気を付けよう”でなければなりません。そして、家庭は、出来るだけ和やかに暮し、きれいな言葉、美しい声で会話をしなければならないこととなります。

親を手本にして育つ

早口でしゃべる親の子供はやはり早口に、乱暴な大声でしゃべる親の子供はやはり乱暴な大声になりがちです。

私は、外から家に電話を掛けた時、電話口に出て応えているのが、家内だと思えば娘だったり、娘だと思えば家内であったりして、つくづく、親子は似ているものだなあ、と感心しています。

普段、肉声で聞くと、親子の音質の違いがよく判って、決して間違えることはないのですが、受話器を通すと、微妙な音質の違いが消えるので、双方が全く同じものに受取れてしまうのです。

私は、この電話での間違いを通じて、普段、親子の違いを聞き分けていたのは、音質よりも、話し方、抑揚の違いであると思っていたことが、誤りであったことを知りました。このように、子供は親の示すものをすべて吸収しているのですから、子供の言葉づかいや話し方が悪いのは、親の示した手本が悪かったためなのです。

アメリカの幼児教育研究所で、生後一年二、三か月の赤ちゃんを選んで、毎日十五分くらい、話を聞かせる赤ちゃんのグループと、そういうことをしないグループとを作り、約半年間の結果を調査したとこ

る、毎日定期的に話を聞かせていたグループの赤ちゃんの方が、智能が著しく伸びていた、ということが判りました。

言葉というものが、いかに幼児の頭脳に良い刺激を与え、智能を発達させるか、ということが、この実験でよく判ります。

ですから、まだ言葉を聞取る能力などないと思われるような赤ちゃんに、しきりに話し掛けているお母さんをよく見かけますが、これは大切な教育になっているわけです。この場合、赤ちゃんは返事が出来ないだけで、後日のためにちゃんとそれを録音しているのですから、お母さんは、出来るだけ心を込めて、美しく、優しく、語り掛けることが大切です。

おむつを取換える時にも、ぶつぶつこごとを言ったり、なにか怒ったように黙ってしないで、「花子ちゃん、いい子ね」と呼び掛けたり、「花子ちゃん、きれいきれいしましようね」と話し掛ける。これが子供を育てる“言葉の教育”です。

コラム

部首 者

古い形は𠂔で、容器からはみ出るほど“ものがひどく、たくさんある”こと。今は“もの”と“ひどくたくさん”と二つに分かれて使われる。単独で使われるときは“もの”で、部首として使われるときは“たくさん”。

【暑】 日(太陽)と“ひどい”という意味の者との会意形声字。“太陽がひどく照りつける”意味で、“あつい”こと。

【著】 “ひどく草がしげる”意味。今は草に関係なく“ひどい”“いちじるしい”あるいは“目立つ”ことから“あらわす(本を書く)”にも使われる。

【都】 “ひどくたくさん”という意味の者と阝との会意形声字。阝はへんの場合、崖だが、つくりの場合は邑まちの意味。よって“たくさんの邑を含んだ大きな町”で“その国の主権者の住むみやこのこと”。

“まなぶ(学ぶ)”という言葉は、昔は“まねぶ”と言いました。それは、“まね(真似)る”と同じ意味の言葉でした。

学ぶは“まねる”、“習う”は“慣れる”

幼児は、見るもの聞くもの、すべてを模倣し、模倣することによって、経験を身に付け、これを能力化していきます。そして、言葉を話す能力は、二歳から三歳にかけて著しく伸びますが、この時期の幼児は、人の話す言葉を実に無造作にまねて、それを巧みに使います。“まね”がいつの間にか“本物”になっています。まさに、“学ぶ”とは“まねる”ことです。

ですから、教育学者が“模倣期”と名付けているこの時期の言葉環境の善し悪しは、その子の言語能力を決定します。従って、テレビやラジオから流れる音も、幼児たちはすっかり吸収しているのですから、

コ ラ ム

部首 果

果で、木の上にくだものになっている形を表した字。“くだもの”が本義。種が芽を出し、木になり花を咲かせ、最後に実を結ぶことから、果は“最後”“はて”の意味。

「果報は寝て待て」の果報は“よい因をなせば求めなくてもひとりによい果となって報いられる”こと。今ではよい因をなすことが忘れられ、果報が単なる“幸運”の意味にとられているのが残念。

聞かせたほうがいいのか、聞かせないほうがいいのか、聞かせるとしたら、どんな番組にスイッチを入れるか、という難しい問題も当然出てきます。

学習の“学”が“まねる”なら、“習(なら)う”は“慣(な)れる”ことです。“慣れる”の古い形は“慣^なる”で、“ならう”はその変化したものです。

物事を繰り返して繰り返して、聞いたり、見たりして慣れるのが、“習(なら)う”ことです。ですから、“学習”とは、まずお手本の“まね”をして、そのまねたことを反復して“なれる”ことです。幼児は“まねる”こととそれの“繰り返し”が大好きです。大人には馬鹿らしく思える“繰り返し”が、幼児には面白くてたまらないのです。この性質があるために、幼児は、何でも楽しんで身に付けることが出来るのです。

物語でも、同じ物語を何回でも聞きたがります。同じ話では飽きるだろうなどと考えるのは、大人の誤った思いやりです。そんな誤った思いやりから、次々と新しい物語をしたのでは、言葉が身に付かず、しかも、集中力のない、飽きっぽい性質の子供にしてしまいます。

急速に物が豊かになった現在では、いわゆる愛情過多から、玩具なども次々と新しい物を与え過ぎる傾向があります。その結果、“繰り返

しを好む”という、発育上欠くことの出来ない重大な性格を壊していません。幼児は、繰り返しが好きな模倣期には、能力が伸びますが、繰り返しを馬鹿らしく思うようになりますと、途端に伸びが衰えてきます。時期がきて、繰り返しの面白さを感じなくなるのは自然ですが、親の誤った愛情から、どこまで伸びるか測り知れない幼児の能力を抑えてしまうことは、非常に残念なことです。

“同じこと”は同じではない

子供がいつまでも同じことをして楽しんでいて、「いつまでそんなことをしていれば気が済むの」と、軽蔑するような、非難するような言葉を掛ける親があります。

こういう親の言葉からも、飽きっぽい性質が子供の中に作られていきます。親は“同じこと”と言いますが、実は外見が同じに見えるだけで、内容は決して“同じではない”のです。

同じお話を何度聞いても、いや、繰り返し聞くたびに、面白さの度合いを増しているのです。同じ本を読む場合にも、二度目には二度目の、三度目には三度目の新しい感動と理解があるのです。

幼児が作っては壊し、作っては壊しているのは、その間に、対象物のいろいろな反応を確かめているのです。何回繰り返しても同じ結果が出る。これも幼児にとって驚異であり、発見です。そしてそこに一つの真理を掴む。つまり、幼児はいろいろな物事の性質を究める実験をしているのです。

幼児の伸びていく生命のエネルギーが、この大変な実験に挑んでいるのです。そして、自分もかつてそのようにして現在の大人になっているのだということを、私たちは忘れがちです。しかし、世の大科学者というのは、実は、この幼児の心を失わなかった人でした。それを長く保ち続けて、繰り返しに耐えられる人だけが、大科学者になり得たのです。

ですから、次々と変った物語を聞かせたり、新しい玩具を与えたりすることに努力し、同じことの繰り返しに対して眉をしかめたり禁止したりする態度は、「しっかりした人になってくれ」と願いながら、実はその反対の人間に育てているのだと言えましょう。

毎日、喜んで聞く同じお話を、子供がいやと言うまでは、親もまた心を込めて繰り返しましょう。いやいやながらするのは、いかに繰り返

しが好きな子供でも、すぐに嫌うようになるでしょう。それは、将来への基礎づくりをしている子供の無意識の努力を、無くしてしまうこととなります。

子供は、その全身全霊を傾け、目を輝かせて私たちのお話を聞きます。私たち大人にとって、これほど尊い聞き手がこの世にあるでしょうか。話し方に上手下手はないと思います。心を込めて、愛情を込めて話さえすれば、子供は喜んで聞いてくれます。下手なら下手で、話し方の練習をさせてもらうつもりで話したいものです。

なお、こうして同じ話を繰り返して聞くことによって、幼児はおのずから日本語の構造というものを体得します。ですから、読んで聞かせるにも、内容、表現とも、出来るだけしっかりとした文章のものを選ぶことが望ましいのは、言うまでもありません。

幼児語は使わない

幼児は、サシスセソをタチツテトまたはチャチチュチェチョに、ラルルレロをダジツデドに発音しがちです。例えば、「お父さん」は「おとーたん」「ラジオ」は「ダジオ」と発音します。これは発音器

官が未発達のために起るもので、そのように発音しようとしているのではありません。ですから、手本になる親が、子供の発音に同調して「おとーたんと遊ぼうね」などと言うのは全くの見当違いですし、子供の発音器官の発達を遅らせることとなります。

総じて幼児語は使わないことです。「おくちゅ」でなく「くつ」、「でんちゃ」でなく「でんしゃ」というふうに、すべて正しい言葉で話し掛け、幼児の録音装置に、あとで訂正を必要とするような吹込みはしないことです。

コラム

部首 未

未で、まだ**未**(果)のように大きくなならない、つまり“未熟”な果物の形を表した字。“まだ…ない”という意味。「未亡人」は“まだ亡くならない人”という意味で夫を失った婦人が自分を指す謙遜語なので、「未亡人」とは本義からすると大変失礼な言い方。

【味】 未熟な果実を待ち遠しく思って“あじをみる”こと。

【妹】 未熟な意味の未に女を加えて、“未熟な女”ということで“いもうと”。